

U「北川先生によると、ホッケ柱とは、潮目近くで生成される約3万匹からなる直径約3mの柱状の群れのことだそうです。ホッケの比重は海水より大きいので、同じ深さに留まるためには絶えず上に向かって泳ぐことが必要です。この反作用で、柱の中心部には下降流が生じ、水面近くでは下降流の中心へと集まる収束流が生じます。潮目付近には緩やかに回転する流れがあるため、収束流があると強い渦が形成されます。その結果、ホッケは海鳥に捕食される危険のある海面に近づくことなく、水中に留まって渦が運ぶプランクトンを捕食できるそうです。」

K「3万匹のホッケが作る渦！面白いですね。シギもホッケも、海洋物理をうまく体得したものです。ホッケは潮目の回転を利用するし、シギは風があるときは回らないそうです。表層シア、ラングミュアセル、碎波などが湧昇を弱めるためだろうと論文では述べていましたね。」

U「彼らのように自発的に渦を作り出す生物は少ないかもしれませんが、海洋中規模渦が生物に大きな影響を与えていることが知られています。この渦は、中規模とはいっても直径数百km、深さ千m以上にも及ぶ巨大な渦です。」

K「次のエッセイのテーマですね。ヒレアシシギは約30cm/sで回るそうですが、中規模渦はどのくらいの速さでまわりますか？」

U「ヒレアシシギと同じ数十cm/sくらいです。」

K「直径数百kmの巨大な渦も、小鳥が足で蹴って進むのと同じ速さで回っていると思うと、親しみがわきますね。今回は巨大な渦と生物のお話し、楽しみにしています。」

アカデミア メランコリア（若手のコラム）

北海道大学大学院環境科学院 松田 淳二

初めての科研費で購入したMacBookの相談をその道の先輩である浦川に持ちかけたところ、華麗なカウンターでこのコラムの話を頂きました。そんな趣旨なら日頃の鬱憤を書いてやるぜうっへっへと思ひ承諾しましたが、いざ学会について物申さんとちょうど開会中の秋季大会を見渡してみても、さして批判するところは思いつきません。むしろ東日本大震災直後の対応の迅速さと情熱には心強く思ったりします。震災WGの池田先生と言えば、直接の指導はあまり受けませんでしたが、セミナーでの発表者の理解を問う質問が私にとって斬新で、ああ大学院とはこういう所なんだと思ったものです。実はそれは多数派ではないようだとなってわかりましたが、それでも学生の発表練習の質疑応答タイムでは、本番で出る質問を予想するのが趣味のようになってきました。予想問題的中率は2割にも満たず、まだまだ偉い先生の頭には追いつけないと思う一方で、時々中すると思わずニヤリとしてしまいます。



ところで発表の上手な方とそうでない方は確かにあって、花輪前会長も、植松会長も話が上手で聞いていて心地よい気分になりますが、そうでない発表のときには心底うざります。以前北大のオムニバス形式の講義のTAをしたことがあります。学部の一年生および二年生を対象に、気候変動についての13回の講義を10名の教員が担当するものです。TAの仕事は講義中にはないので、その間、教員の「評価」をしていました。講義内容を既に知っているからこそ、その講義方法に評価をつけることができます。え、その説明だと伝わらないだろうと思うときもありますが、その一方で学生が「とてもおもしろかったです」との感想を残すのは世の中の理不尽のごく一部かもしれません。TAは実に楽しくて、回転水槽実験のTAをした時など大変勉強になりました。水槽実験は大学教育ではそれほどメジャーではないらしく、その経験があると一緒に読書会をやっている他大学出身の松村先生や阿部さんに対して一抹の優越感を感じる時もあります。

読書会はどうも英語の教科書を教材にすると英語にとらわれてうまくいかないと思っていた節があり、だからといって日本語で書かれたものもほとんどない（既に読んだ）ので、kubok先生の講義ノートを使っています。講義ノートに沿って式変形を行うこともあれば、気になったことを計算してみることもあり、自由な感じで進みます。キーワードは「すっきりした」で、その反対の「何となくもやもやした感じ」を一つずつやっつけています。kubok先生はかつて同室だった大先輩曰く昔は今と比べ物にならないくらい恐ろしかったとのことだし、私も同感でしたが、いつの間にか親しみやすい先生になりました。それはきっと女子学生が多かったあの代のせいだと思います。その幾多の事情を知らずに「ちょっ、先生に向かって何を…！」とはらはらしたのも今となっては昔のこと…ではなく、今ははらはらです。

と、とりとめの話でしたが、このように話題が連想ゲーム的に変わっていくのが女性の会話スタイルらしいです。思考パターンを意図して変えないとついていけませんが、これも一つの思考の訓練とでも思うべきなのかもしれません。次号は情熱のある人に熱く語っていただきますが、それが誰であるかを言うにはこの余白は狭すぎるなどとは、もはや情報革命後の現代では通用しなくなりました。